ぶどう酒をお造りになったイエス様

２０１１年1月
西九州伝道所
佐々木正明

クリスチャンの多くは、クリスチャンではない人たちに取り囲まれて生きています。日本に生きるクリスチャンは、当然、日本文化の中で、日本文化を当たり前のこととして受け入れ、それを守っている人たちの中で生活しています。

日本人が日本の習慣を守るのは、多くの場合、「良い悪い」の問題ではありません。ちょうど沢庵を食べ、お萩を頬張るのと同じです。外国人に、「タクアンは塩辛いから体に悪い」と言われようと、「あの臭いは何とかならないかと」嫌がられても、いらぬおせっかいです。豆を甘く煮て食べるのは日本人だけだ。それでライス・ボールを包んで食べるなんて、クレィジーだ」と言われても、気にもかけません。そのうちに、寿司と同じように、沢庵が世界を席巻するぞと言いたいくらいです。

人間は誰でも、自分が育った文化、習慣や物事のやり方にはとても保守的です。ところが、その日本の文化に真っ向から立ち向かって、これを破壊して定着しようとしたのがキリスト教です。だから、キリスト教は地域社会で嫌われるのです。

日本の地域社会にしっかりと根付いているのは、神道的な感覚です。氏神さまがあり、住民全員が、知らぬ間にその信徒として登録されています。地域の御祭りは、大体の場合はこの氏神様を祭る行事で、地域住民は全員、なにかの形で参加をします。普段はどこにあるのかさえ知らない神輿が担ぎ出され、商店街を練り歩きます。お札が配られ、しめ縄が張られます。

家族・親族の絆を強めるのは、仏壇を要（かなめ）にした仏教の祭りごとです。法事だとか何回忌だとかが折々に開かれて、親戚同士が集まり絆を強めます。そこでは「あらっ！　あの人も内の親戚だったの？」「そうよ！　おじいちゃんの従兄弟のはとこの・・・」と言うことになり、自分が「どこの馬の骨か」と呼ばれる根無し草ではなく、人々の輪の中にいるという帰属意識、アイデンティフィケーションを持つことができ、安堵感を抱き、精神的安定につながるのです。

人間はだれも、自分ひとりで生きているのではありません。それはイエス様の時代も同じでした。イエス様はそのことを良くご存知で、生活なさいました。

あるときイエス様は、村の結婚式に参加されました。田舎のこととて、家族親戚ばかりではなく、村中の人々、あるいは近隣の村々からも人々が集まってきて、何日も、何日も続く結婚式です。結婚は、当事者だけの問題ではなく、家族親族、そして地域共同体の大きな出来事だったのです。若い男女はそのような感覚の中で結婚するために、離婚率も低かったといえます。

それはともあれ、イエス様はそのような結婚式においでになったのですが、途中で困ったことが起きました。このような祝いの席には絶対に欠かせない、ぶどう酒が切れてしまったのです。これは参加した人をがっかりさせ、主催者には大きな恥となることでした。結婚式自体が台無しになり、花婿は笑い者にされ、花嫁は陰口を叩かれなければならない状態です。

ところが、ぶどう酒が切れてしまったことをそっと知らされたイエス様は、奇跡の力を発揮して、大量のぶどう酒、しかも最高のぶどう酒を補給してくださったのです。この奇跡の物語が記されているヨハネの福音書の第 2 章を読むと、およそ 80 リットル前後も入る六つの水がめを、ぶどう酒で一杯にされたのです。簡単にいうと、18 リットル入りの石油用ポリタンク、30 個分ほどです。それにしても、ものすごい量です。当時のユダヤの田舎の結婚式が、どれほど盛大であったか、分かるというものです。主催者が思いもかけないほどの人数がお祝いに駆けつけたのでしょう。中には「占めた！　ご馳走とぶどう酒にありつける」と、紛れ込んだ連中もたくさんいたことでしょう。あるいは、結婚式が長引いたのかもしれません。それで、ぶどう酒がなくなってしまったのです。

おもしろいことに、このイエス様の奇跡の物語を素直に喜べない、「真面目な」クリスチャンたちがたくさんいるのです。ピューリタンの影響やホーリネスの影響を受けた、クリスチャンたちです。そういう私も、その流れにある教会の牧師です。私たちの教会の伝統では、酒を飲むことは罪なのです。今でこそ、少しは柔らかくなりましたが、伝統的に、酒もタバコも絶対に駄目と、信徒たちを厳しく指導して来たのです。「酒タバコ　飲まぬ吸わぬの耶蘇教（キリスト教）は　ああ面倒な宗旨なり」という戯れ歌が詠われたほどです。

酒は乱行のもとだから飲まないというのは、良い習慣です。聖書も酒に飲まれることを禁じています。つまり、酔っぱらうことをたしなめているのです。何をとって酔うというのかとなりますが、要するに、乱行の元になるようではいけないから、慎みながらたしな

みなさいということなのです。いまの日本では、飲酒運転が厳しく取り締まられるようになりましたので、そのようなことに対する配慮も必要でしょう。

ところが私たちの教会は、禁酒法という法律までできたことがあるアメリカで、その法律を成立させた背後の力であったのです。「カチンコチンのクリスチャン」の血統の中に生まれたのです。だから、イエス様が水をぶどう酒に変えられたという奇跡は、納得できないし、受け入れられないのです。私たちの姉教会に当たるアメリカの団体では、いま、自分たちの注解を加えた聖書を大々的に売り出していますが、それを読むと、イエス様がお造りになったぶどう酒は、アルコールの入っていないぶどう酒だという説明がついています。「馬鹿を言っちゃーなんねぇ。アルコールの入ってねぇぶどう酒なんぞ、あってたまるかー！」と言いたいところですが、その説明は実に説得力があり、多くの信徒たちだけでなく、牧師たちの多くも信じているようです。

でも、ヨハネの福音書の記述を素直に読むと、イエス様は間違いなく、最高のぶどう酒、つまり「しっかりと」アルコールが入っているぶどう酒をお造りになったのです。そのような祝いの席では、多くの人がぶどう酒に酔うことは当然だったのです。ヨハネの福音書の記述は、そのように読み取れます。イエス様がお造りになったぶどう酒は、間違いなく、気持ちよく酔うことができるぶどう酒だったのです。

聖書には、イエス様がぶどう酒をたしなまれた記述もありますし、使徒パウロの手紙には、教会の中でも「酔っ払っている者が」いたほど、ぶどう酒はふつうに飲まれていたことが分かります。（Ｉコリント 11：21） パウロはそこで、「ぶどう酒を飲んではならない」とか、「酔っ払うとはなにごとか」と、目くじらを立ててはいません。 パウロは弟子のテモテに、健康のために少量のぶどう酒を飲むことさえ勧めています。ところが、私たちの教会は、自分たちの主義主張のために、聖書の教えさえ曲げて、絶対に酒は飲むなと教えるのです。

確かに聖書は、酒に酔っ払うことは良くないと戒めています。だから、酒に酔わないのは良いことです。酒をたしなまないのも良いこととしましょう。でも、酒をまったく禁じるのは、聖書の教えではありません。かえってイエス様は、地域の文化、習慣というものを重んじて、わざわざ最高のぶどう酒をお造りになって、人々が充分に飲んで楽しめるようにしてくださったのです。

イエス様は、集まって喜び祝う人々をご覧になり、彼らを祝福して、わざわざぶどう酒を造ってくださいました。それは、本来の贖いの働きとは関係のない奇跡です。いわば、そんな奇跡、行わないで欲しかったと思う教会があるほどの奇跡です。私たちの教会の教

えからすると、イエス様には、そのような場には出来るだけ出席して欲しくなかったのに、それに参加し、酒の場に連なったというだけでなく、酒を準備してくださったのです。それほど、イエス様は、地域社会を大切にしておられたということであり、人々の喜びを喜びとしておられたということです。

私たちの教会に、そのくらいの柔軟性があればと、心から願うものです。私たちの牧師に、もう少し、社会との協調性があればと心から望むものです。「酒に飲まれるな」と教えるよりも、「酒は絶対に駄目」と教えるほうが、はっきりしていてわかり易く、指導もしやすいという一面もることでしょう。でも、そのようなかたくなな自分の教会の伝統が、地域社会では受け入れられないクリスチャンを作り、福音自体が受け入れられなくなっているのです。ことは酒の問題だけではありません。他宗教に対する態度、地域の祭りや、葬式や法事に対する態度も同じです。

私たちは自分が生まれ育った教会を大切にします。その教えに誇りを持ちます。それはそれで当然であり、大いに結構なことです。でもそれよりも、聖書を大切にしなければなりません。教会の教えではなく、聖書の教えによるのが、本来のクリスチャンの生き方です。